# 第 23 回日本都市計画学会中部支部研究発表会の報告

**2012 年 10 月 20 日（土）　会場　中部大学名古屋キャンパス**

第 23 回日本都市計画学会中部支部の研究発表会が、平成 24 年 10 月 20 日（土）に「中部大学名古屋キャンパス」において開催された。例年は、午前中に研究発表会を行い、午後からシンポジウム等が行われるところ、今回は午後からということで、研究発表会のみの開催となった。

研究発表の件数は、昨年度（18 編の発表）より少し少なく、14 編の研究発表が行われた。

## 1．第一セッション（13:00～14:40）

### 第一会場・・・司会：松山　明（中部大学）

第一会場（501 教室）では、(1)「観光まちづくりの戦略と実践の連動～三重県四日市市を例として～」（服部　敦）、(2)「名古屋駅地区のスカイラインの現状と開発による変化に関する研究」（慮　尚書、村山顕人、清水裕之）、(3)「街区毎に見る市街地の緑被率と土地利用特性の関係～名古屋市を対象としたケーススタディ～」（川口暢子、村山顕人、清水裕之）、(4)「名古屋市における旧耐震基準分譲マンションの特性～駅そば生活圏における居住機能の充実に向けて～」（千葉啓広、村山顕人、清水裕之）の発表が行われ、会場からも質問が出された。

### 第二会場・・・司会：岡本　肇（中部大学）

第二会場（610 教室）では、(8)「多様な主体の関係性を誘発する公共施設づくりにおける中間支援組織の役割～岡崎市図書館交流プラザ Libra を事例に～」（三矢勝司、吉村輝彦、秀島栄三）、(9)「シナリオ・物語に基づく実践的まちづくり支援のあり方～円頓寺・四間道界隈まちづくりを事例に～」（藤澤　徹、吉村輝彦、秀島栄三）、(10)「北陸三県の市町村における建築物マテリアルフローの将来シナリオ分析」長谷川正利、奥岡桂次郎、大西暁生）、(11)「都道府県における建築物マテリアルフローの将来シナリオ分析」若林晃太、奥岡桂次郎、大西暁生）の発表が行われた。会場からも活発に質問が出され、たとえば(8)では、公共施設づくりには地域密着型の中間支援組織の役割が重要であり、施設の「計画・設計」から「建設・会館」まで、また開館後の「施設運営」までの「企画段階から建設・運営までの市民参画」が重要であり、市民の意見を反映した空間づくりが年間 150 万人を超える来訪者を迎える成果を上げているようであるが、その原動力は何なのか、という質問が出された。また、(11)では都道府県における建築物のマテリアルフローについて、将来シナリオ分析を試みた研究であり、結果として投入量がすべてのシナリオ（A：現状維持型シナリオ、B：高所得・高密度な活力社会実現型シナリオ、C：ゆとり社会実現型シナリオ）で減少しているが、投入量ならびに廃棄量が減少するから良いと言えるのだろうか、という質問が出された。

## 2．第二セッション（15:00～16:15）

### 第一会場・・・司会：吉村輝彦（日本福祉大学）

第一会場（501 教室）では、(5)「名古屋市白壁・主税・撞木地区における緑被の実態と変遷」（藤原由佳梨、村山顕人、清水裕之）、(6)「臨床環境医による地域生命圏の診断・治療技法試験～伊勢湾流域圏を舞台として～」（高木淳二、村山顕人、清水裕之、高野雅夫）、(7)「ドイツ、ウエストザクセンにおける地域計画の構成」（輿石和弘、清水裕之、村山顕人）の発表が行われ、会場からも質問が出された。

### 第二会場・・・司会：服部　敦（中部大学）

第二会場（610 教室）では、(12)「土地被覆分類手法の検討と都市内微細緑地の把握」（前崎隆一、大西暁生）、(13)「街区公園と街路の一体的な共空間への再構成」（安本倫章、木幡寿人、野坂和典、長谷川博次、堂本博滋、三寺　潤、生野慎一郎、川本義海）、(14)「鉄道駅とのアクセス性に着目した都市開発動態分析～福井市を事例として～」（金谷成浩、三寺潤、川上洋司）の発表が行われた。会場から、土地被覆分類手法としてのエキスパート分類で用いるトレーニングデータに汎用性はあるのか、エキスパート情報に、客観性はあるのか、などの質問が出された。また、整備から 30 年以上経過した街区公園とその周辺街路の利用実態と意識を調査した結果、まだ改善希望の意識はないというアンケート結果であったが、大事なのは街区公園と街路空間の一体化ではないのか、という意見が出された。駅周辺への都市開発の集積は相対的にみて大きいと言えるが、都市開発の集積が高まっていく傾向は未だ見られない。しかし、都心部と一部の郊外駅周辺において集積傾向を示す駅がみられる、という結果であったが、隣同士の駅ではアクセス性が重なっている（被っている）ところがあるが、どのように計算しているのか、という質問が出されるなど、非常に活発に質問が行われた。

（文責：高山純一(金沢大学)）